

第四章 本調査研究の総括と今後の課題

第四章 本調査研究の総括と今後の課題

第一節 本調査対象者の特徴とニートの状態にある若者の全体像

1. 本調査対象者の特徴

本調査は、若者自立塾とサポートステーションの利用者をニートの状態にある若者ととらえ、彼ら・彼女らの実態から、日本におけるニートの状態にある若者への支援方策を探ろうとする試みであった。第1章、第2章の分析結果から、調査対象者の主な特徴をもう一度まとめよう。

若者自立塾とサポートステーションの利用者像の違いをひとまず捨象して全体をみると、つぎのような特徴がある。進学率は同世代の水準から見てとくに低いとはいえないが、高校、大学・短大、専門学校各段階で中退している割合が3割を超え、しかも在学中に1ヶ月以上の欠席経験者も各段階で2割前後いる。4割弱が不登校を経験している。また、8割近くは何らかの就業歴をもっているが、経験した職種をみると、サービス職、生産労務職、営業販売職などの熟練を要しない職種のアルバイトなどが多く、不安定な労働市場の波を被りやすい者が多い。

ニートの状態にあった期間が1年を超えている者が多数を占めている。これまでの生活経験のなかで半数近くが経験している項目に、「学校でいじめられた」、「会社をじぶんでやめた」、「ひきこもり」、「精神科・心療内科の治療」、「職場の人間関係のトラブル」がある。学校でいじめられた経験者は55%と高い数値を示していて、学校でのいじめとその後の職業的自立困難との間には関連性があることは、他の調査でも指摘されている（小杉礼子編著『フリーターとニート』勁草書房、2005年）。

これらのネガティブな経験の背景にあると思われるのが、「人に話すのが苦手」（6割強）を筆頭に、「手先が不器用」「計算が不得意」「字を書くのが不得意」など基礎的スキルの苦手意識である（これらは本人が感じているもの）。生活行動に関しても、面接、電話、対人関係を苦手とする者が6割を超える。また、「周囲のやり方をみて仕事を覚えること」、「仕事で失敗を繰り返さない」、「仕事を覚える」のを苦手とする者も5割から6割に達している。これらのハンディが各段階で人間関係上のつまずきの原因となり、仕事を続けるうえで障害となっていることが想像される。とはいえ、このような解釈には留保も必要であろう。理由はともあれ、学校や仕事でつまづいたことがきっかけとなって、人間関係に自信を失い、疎外されていくケースも少なくないからである。